母、或イハ街

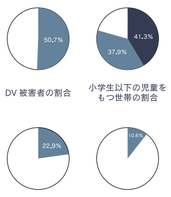
守られながらも開かれた母子寮の提案

あなたは母子寮というものを知っているだろうか。私は小学３年からの１年間、母子寮で暮らしていた。
母子寮には約半数の割合でDV被害者である母子家庭が集い暮らしている。母子を守るという面は不可欠だが、閉鎖的すぎるが故にかえって孤立が進んでいるように思う。物理的遮断により守るのではない、守られながらも開かれた母子寮の提案を行う。

01 背景 - 幼少期の母子寮での暮らし

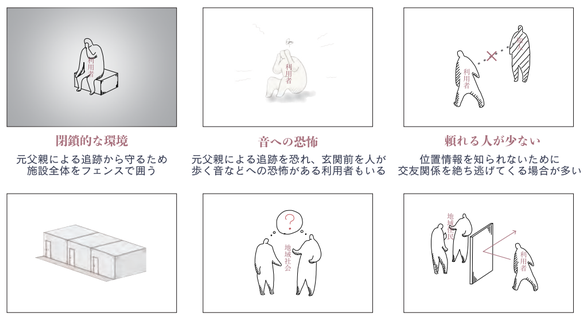
施設数	定員	現員
221 箇所	4,592 世帯	3,367 世帯 児童 5,626 人

（厚生労働省　令和２年３月末）



母子寮の正式名称は「母子生活支援施設」といい、母子を保護するとともに、その自立を促進するため、就労、家庭生活及び児童の教育に関する相談及び助言を行う等の支援を行っている。各母子世帯の居室のほかに集会・学習室等があり、母子支援員、少年指導員等の職員が配置されている。母子寮に入所しているうちの約半数の世帯は DV 被害者であり、それに加えて経済的困窮、親自身が障害等を抱えている要子育て支援、10 代や未婚の妊娠、子育て等に不安がある特定妊産婦の受け入れを行なっている。

受け入れ後は、法的解決が完了し、就労・子育て・生活等の状況を考慮し、自立の見通しがついた段階までの支援を行う。
子供の年齢層が幅広く、妊産婦から高校生までの利用者が暮らしている。



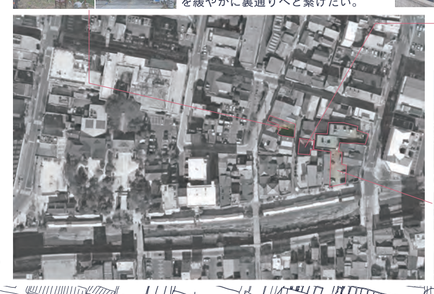
02 寛容性を持つ都市 - 長野県松本市縄手通り商店街

SITE1 タクシー待合所と空き地

この空き地は過去に火事で２軒の家屋が燃えた後、新たに建築はされずに残っている。この倉庫を路地化し、湧水のある広場の賑わいを緩やかに裏通りへと繋げたい。

SITE2 商店街の裏通りにある公民館

縄手通り商店街の裏道。通りの中央部には古い木造でできた公民館があり、催事などの際に利用されているが、近年は日常的に利用されることは減少してしまっている。



SITE3 商店街に接する駐車場と介護施設

商店街に面する駐車場となっている敷地とその奥の介護福祉施設を新たな母子寮を計画する敷地とする。駐車場は南北に細長く介護福祉施設の土地は入り口は狭いが奥には広がりがある。観光地化した通りに、地域住民が心休まる独りを楽しめるような場を提案する。

03 設計手法 - 防御機能の心理的距離への置き換え

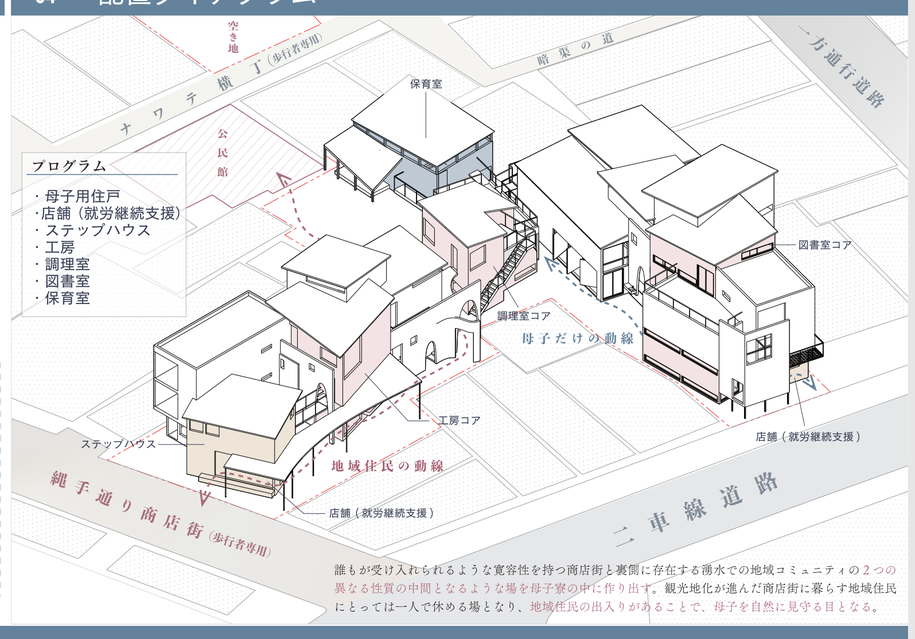
GL レベルでは、地域住民の動線と母子寮の動線の２つの軸線を通す。周辺状況を読み取り、大きく３つの領域に分けて空間を構成する。

集団のための空間にいても、一人になったような気分を感じる空間を作り出す。近いようで遠く、遠くにいるようで実は近いというような距離感を設計する。

壁やフェンス

物理的な遮断　心理的距離を遠くする

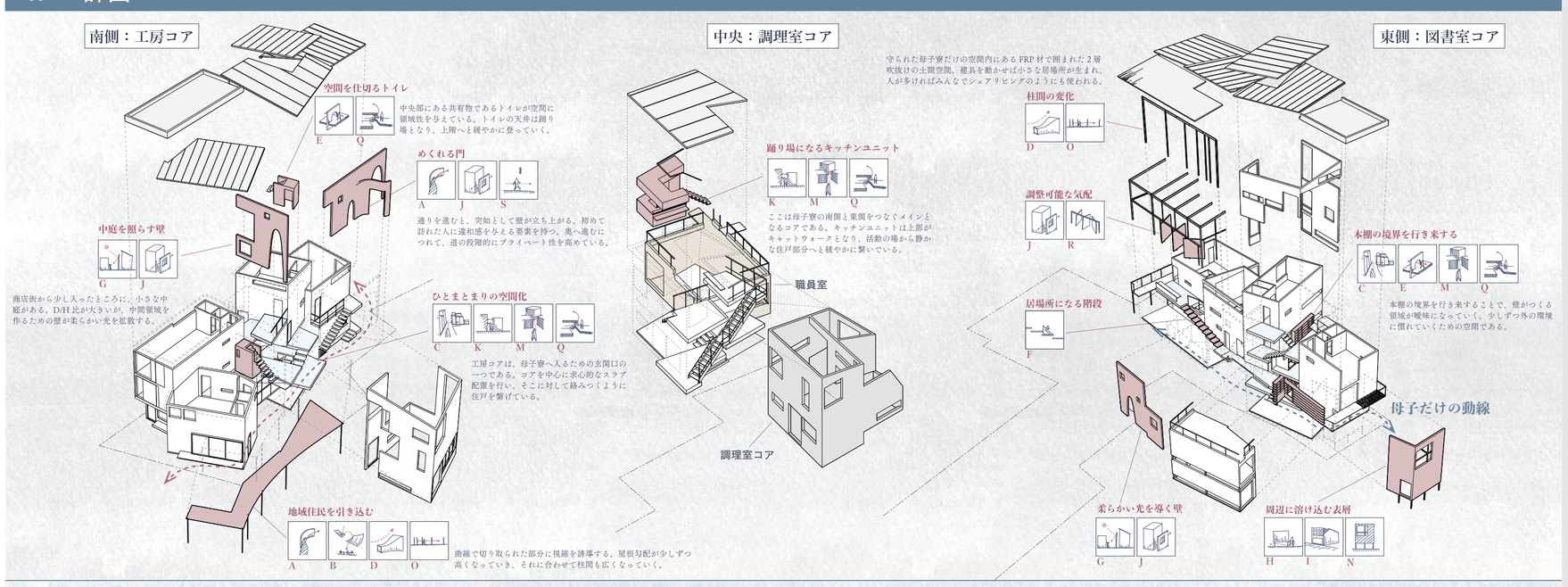
04 配置ダイアグラム

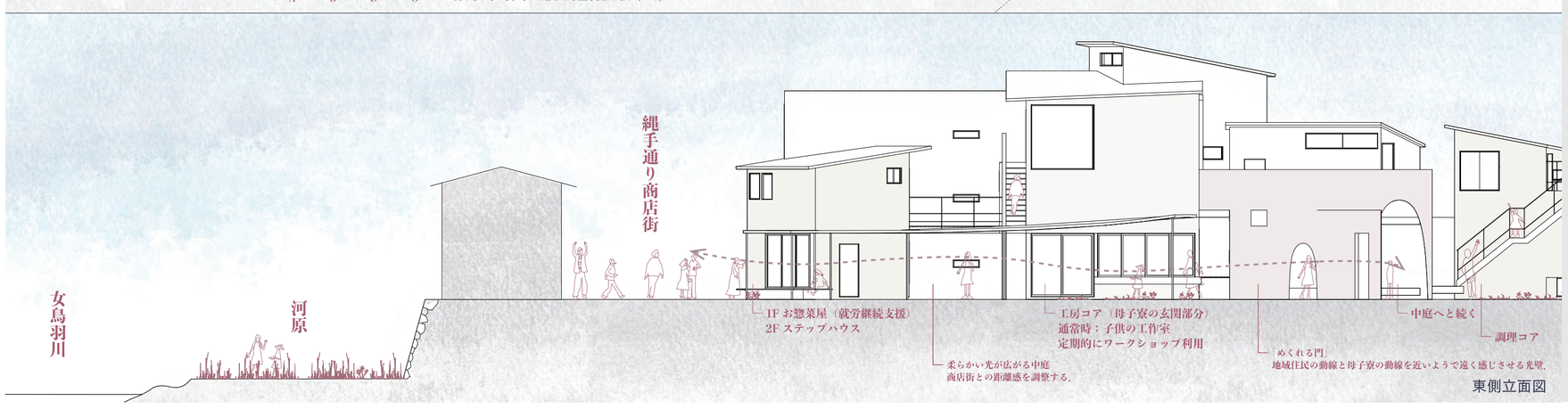


プログラム
- 母子用住戸
- 店舗（就労継続支援）
- ステップハウス
- 工房
- 調理室
- 図書室
- 保育室

誰もが受け入れられるような寛容性を持つ商店街と裏側に存在する湧水での地域コミュニティの２つの異なる性質の中間となるような場を母子寮の中に作り出す。観光地化が進んだ商店街に暮らす地域住民にとっては一人で休める場となり、地域住民の出入りがあることで、母子を自然に見守る目となる。

05 計画

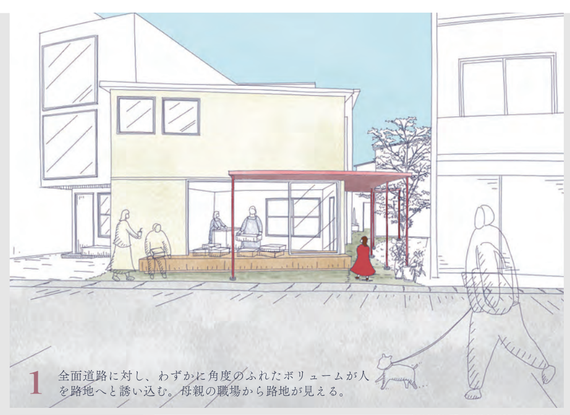




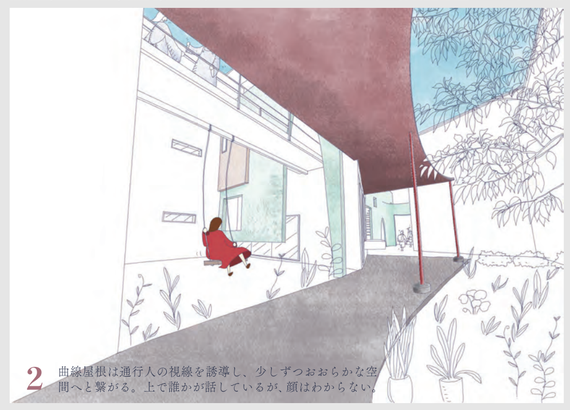
ID：0656

手法の手掛かり

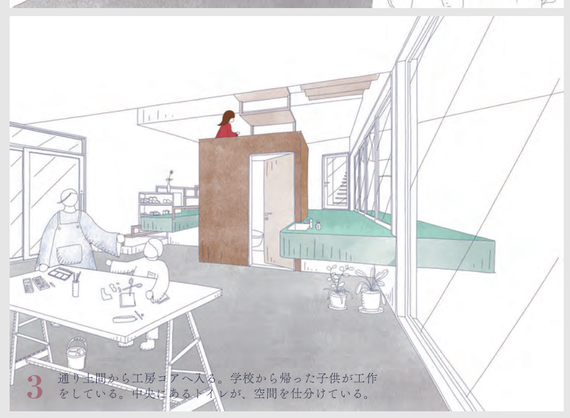
建築の構成要素である壁や柱、開口部などの要素を再解釈し、心理的距離を遠くするための役割として置き換えを行う。



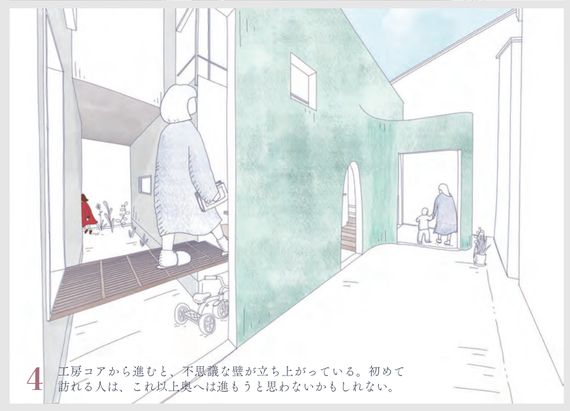
1 全面道路に対し、わずかに角度のふれたボリュームが人を路地へと誘い込む。母親の職場から路地が見える。



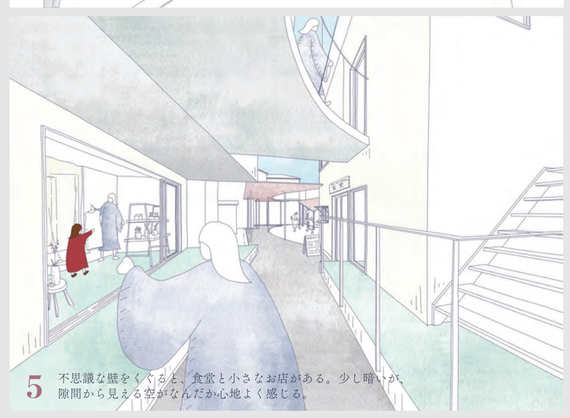
2 曲線屋根は通行人の視線を誘導し、少しずつおおらかな空間へと繋がる。上で誰かが話しているが、顔はわからない。



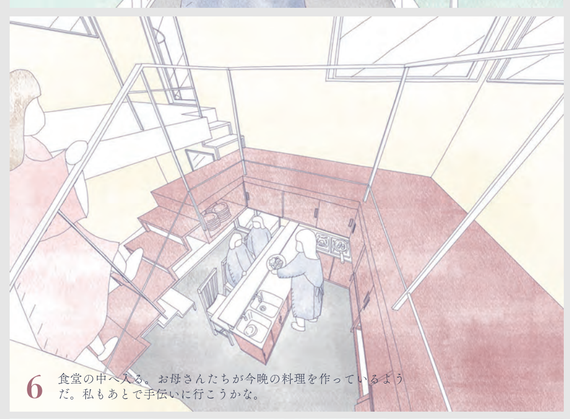
3 通り土間から工房コアへ入る。学校から帰った子供が工作をしている。中央にあるトイレが、空間を仕分けている。



4 工房コアから進むと、不思議な壁が立ち上がっている。初めて訪れる人は、これ以上奥へは進もうと思わないかもしれない。

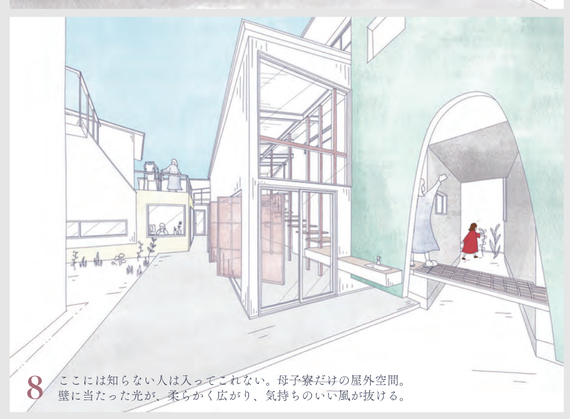


5 不思議な壁をくぐると、食堂と小さなお店がある。少し暗いが、隙間から見える空がなんだか心地よく感じる。



6 食堂の中へ入ると、お母さんたちが今晩の料理を作っているようだ。私もあとで手伝いに行こうかな。

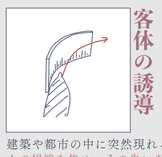
7 調理室を抜けると、明るくて広い中庭に繋がる。姿は見えないが、奥の保育室から子供が遊ぶ声が聞こえる。



8 ここには知らない人は入ってこれない。母子寮だけの屋外空間。壁に当たった光が、柔らかく広がり、気持ちのいい風が抜ける。

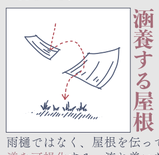
9 壁から反射してきた柔らかな光は、読書するにはもってこいだ。商店街の賑やかさから一番遠い、静かな空間はとても落ち着く。

A 客体の誘導



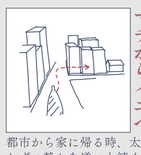
建築や都市の中に突然現れる曲線は、人の視線を集め、その先にあるものを知覚させる。

B 涵養する屋根



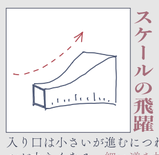
雨樋ではなく、屋根を伝って雨の通り道を可視化する。流れ着いた先には植栽を植え、一つのレイヤーとなる。

C マチからイエへ



都市から家に帰る時、太い通りから少しずつ静かな道へと続く。建築内にも奥へ行くにつれての段階を持たせる。

D スケールの飛躍



入り口は小さいが進むにつれてスケールが大きくなる。細い道を抜けた先に開けた空間があることを知覚させる。

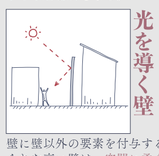
E 境界の行き来

建築を作る上で壁は欠かせない要素である。壁を作ることは仕方ないことだが、行き来すれば境界が曖昧になる。

F 居場所になる階段

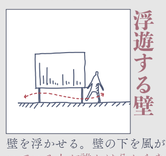
勾配が緩く、踏面の大きい階段は、もはや移動のための装置でなく、一つの小さな居場所となる。

G 光を導く壁



壁に壁以外の要素を付与する。白く塗られた高い壁は、空間に柔らかい光を届ける光壁となる。

H 浮遊する壁

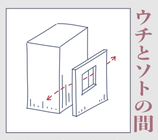


壁を浮かせる。壁の下を風が抜け、歩いている人が誰かは分からないが、気配を感じることができる。

I 表層の擬態

建物の表情を周囲に溶け込ませる。既存の建物への配慮と共に、母子寮を地域の中に隠すことにも繋がる。

J ウチとソトの間

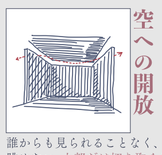


自室から急に外に出るのは抵抗がある。室内とも屋外とも言えない空間はどこか落ち着く中間領域となる。

K 心地いい狭さ

ただ広いこと＝豊かとは限らない。狭さの中には身体性が存在し、そこから小さな自由や豊かさが生まれる。

L 空への開放

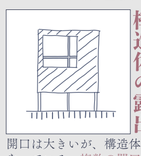


誰からも見られることなく、ただ空を眺めたい。上部だけ切り取られた壁は、空を切り取る額縁のようでもある。

M 見通せない路地

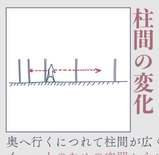
道は連続しているが、立つ場所によって見通しが変化する。都市の中を散策するような体験が生まれる。

N 構造体の露出



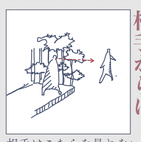
開口は大きいが、構造体が剥き出しになっている。複数の開口の集合に見えるため、大きさを感じさせない。

O 柱間の変化



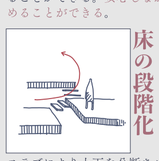
奥へ行くにつれて柱間が広くなっていく。一人のための空間から少しずつ大きな空間へ繋がることを知覚させる。

P 相手からは見えない



相手はこちらを見れないが、自分は見ることができる。安心しながら外を眺めることができる。

Q 床の段階化



スラブにより上下を分断させるのではなく、全体がひとまとまりの空間となり、かすかな気配を感じる。

R 調整可能な気配

その日の気分によって開き具合を調整する。一人で使う時は見られにくく、みんなで使う時は大きな空間となる。

S 敷居をまたぐ

地面は連続しているが、通行人に境界を意識させる。親しい関係でない人は奥へと進もうとは思わない。